

保育場面から見る幼児理解「新たな教師の学び」に対応した オンライン研修コンテンツ開発事業 成果確認書

確認テスト

以下 (1) ～ (10) の各文が、「保育場面から見る幼児理解」の3本の動画の内容に照らして妥当である場合には「a. 妥当である」を、妥当でない場合には「b. 妥当でない」を選択してください。

- (1) 「アブラムシばいばい作戦」及び、「葉っぱは生きているか」の保育の特徴は、担任保育者の渡辺先生による、活動の展開の綿密な計画と、周到な準備のもと行われたことである。

a. 妥当である b. 妥当でない

- (2) 「アブラムシばいばい作戦」及び、「葉っぱは生きているか」の保育と関係する幼児期の発達特徴として、第1に、「子どもが遊びを中心として、頭も心も体も動かして、主体的に様々な対象と直接関わりながら総合的に学んでいくこと」、第2に、「遊びを通して思考を巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使って、友達と様々なことを学んでいくこと」が挙げられる。

a. 妥当である b. 妥当でない

- (3) 子どもが、何らかの疑問や、その確かめ方のアイデアなどの関心を生み出す時、いっけん関係の薄そうな活動での経験や、何か月も前の出来事が参照されている時がある。

a. 妥当である b. 妥当でない

- (4) 渡辺先生の幼児理解によれば、トモコが、アブラムシ退治の方法を家で考えてきたことと、葉が萎れたソラマメの豆の生育を気にかけていたこととは関係している。

a. 妥当である b. 妥当でない

- (5) 子どもの関心は、保育者が介入しない場合にのみ、周囲の子どもに伝わる。

a. 妥当である b. 妥当でない

- (6) 子どもが関心をもったことに取り組むにあたって、保育者は、事前に活動での子どもの姿を完全に予測して、それへの対応を考えておく必要がある。

a. 妥当である b. 妥当でない

(7) 「葉っぱは生きているか」の保育において、子どもが、仮に、「葉っぱは生きていない（生き物ではない）」という、大人の知識と異なる結論を出しても、渡辺先生は、子どもの結論を訂正しなかった。

a. 妥当である b. 妥当でない

(8) 子どもたちが、互いに互いを大切な存在として感じるようになる要因として、子どもが何かに熱中していること、及び、その子どもが他児と影響を与え合うことが挙げられる。

a. 妥当である b. 妥当でない

(9) 子どもの関心や発想を尊重した保育を行うことと、子どもの思いを受容することとは無関係である。

a. 妥当である b. 妥当でない

(10) 渡辺先生の考えによれば、今担任をしている5歳児クラスの子どもたちの、クラス全体の関係性は、4歳児クラスの頃から変わっていない。

a. 妥当である b. 妥当でない

解答と解説

- (1) 「アブラムシばいばい作戦」及び、「葉っぱは生きているか」の保育の特徴は、担任保育者の渡辺先生による、活動の展開の綿密な計画と、周到な準備のもと行われたことである。

《答え：b. 妥当でない》

「アブラムシばいばい作戦」及び、「葉っぱは生きているか」は、子どもが関心をもつこと、そこから発想したことを尊重して行われた保育と特徴付けられます。活動の展開を、保育者があらかじめ決めたものではありませんでした。

- (2) 「アブラムシばいばい作戦」及び、「葉っぱは生きているか」の保育と関係する幼児期の発達特徴として、第1に、「子どもが遊びを中心として、頭も心も体も動かして、主体的に様々な対象と直接関わりながら総合的に学んでいくこと」、第2に、「遊びを通して思考を巡らし、想像力を発揮し、自分の体を使って、友達と様々なことを学んでいくこと」が挙げられる。

《答え：a. 妥当である》

幼児期に設問文のような発達特徴があることは、「はじめに 架け橋期の教育、幼児期の特徴」で述べた通りです。そして、「アブラムシばいばい作戦」及び、「葉っぱは生きているか」の保育で子どもたちは、アブラムシや葉っぱなどの対象と直接関わって、「頭も心も体も動かして」活動しました。

- (3) 子どもが、何らかの疑問や、その確かめ方のアイデアといった関心を生み出す時、いっけん関係の薄そうな活動での経験や、何か月も前の出来事が参照されている時がある。

《答え：a. 妥当である》

動画の中では、渡辺先生の幼児理解に基づいて3つの例を挙げています。第1は、葉っぱが萎れた出来事から、「葉っぱは生きているか」と疑問を生み出したこと。第2は、4種の液体の効果を「比べる」発想において、前年度のザリガニの餌を比べる活動の経験が参照されていたのではないかとということ。第3が、液体を混ぜない方が良いという主張やそれへの共感、動画内で時期は明示していないものの、色水遊びの経験が参照されていたのではないかとということです。

- (4) 渡辺先生の幼児理解によれば、トモコが、アブラムシ退治の方法を家で考えてきたこ

とと、葉が萎れたソラマメの豆の生育を気にかけていたこととは関係している。

《答え：a. 妥当である》

トモコは、アイデアのリストを始めに持ってきた子どもでした。渡辺先生の幼児理解によれば、だからこそ、自分が持ってきたアイデアで豆が生育できるようにと、特に強く願っていました。このように、子どもの個別的な背景も含めた幼児理解を保育者は行っています。

(5) ある子どもの関心は、保育者が介入しない場合にのみ、周囲の子どもに伝わる。

《答え：b. 妥当でない》

ある子どもの関心は、たしかに、保育者の援助なしに、子どもが友だちのやっていることを目にするなどによっても周囲の子どもに伝わります。一方で、「アブラムシばいばい作戦」や「葉っぱは生きてるか」の事例において、保育者も、子どもの関心を帰りの会の話題にしたり、作戦の一覧を保育室に貼ったりといった「子どもの関心を広げる援助」を行いました。

(6) 子どもが関心をもったことに取り組むにあたって、保育者は、事前に活動での子どもの姿を完全に予測して、それへの対応を考えておく必要がある。

《答え：b. 妥当でない》

まず、子どもが関心をもったことに夢中で取り組むことで、それまで見せたことなかった姿を見せることがあります。つまり、活動での子どもの姿を事前に完全に予測するのは困難です。そうした姿から、保育者はさらなる幼児理解を行います。次に、子どもの発想を、保育者は完全に予測することはできません。だからこそ、子どもの発想に保育者が驚いたり、感心したり、面白がったりすることにもつながるのです。

(7) 「葉っぱは生きてるか」の保育において、子どもが、仮に、「葉っぱは生きていない（生き物ではない）」という、大人の知識と異なる結論を出しても、渡辺先生は、子どもの結論を訂正しなかった。

《答え：a. 妥当である》

渡辺先生が重視していたのは、植物についての知識の習得ではなく、納得するまで自分で試すことでした。なお、「アブラムシばいばい作戦」の場合も同様に、自分で試した結果、納得できた子ども自身の答えが尊重されました。

- (8) 子どもたちが、互いに互いを大切な存在として感じるようになる要因として、子どもが何かに熱中していること、及び、その子どもが他児と影響を与え合えることが挙げられる。

《答え：a. 妥当である》

子どもが、自らの関心に基づいて何かに熱中する時、子ども同士の影響の与え合いが生まれます。まず、熱中する姿をみた他の子どもが、「面白そう」「自分もやってみたい」と、その子どもの関心に引き込まれます。また、もう一方の子どもにとっても、自分の関心を友だちが共有してくれるのは嬉しいことでしょう。そのようなことが積み重なると、子どもたちが、互いに互いを、大切な存在として感じるようになっていきます。

- (9) 子どもの関心や発想を尊重した保育を行うことと、子どもの思いを受容することとは無関係である。

《答え：b. 妥当でない》

「アブラムシばいばい作戦」や「葉っぱは生きているか」の事例で渡辺先生は、一人一人の子どもの関心に注目し、子どもの発想に驚き・感心し・面白がって、それを保育に活かそうとし、子どもが納得して出した答えを尊重する姿勢を見せていました。これらは、「子どもが関心を持っている事には価値がある」と伝えるメッセージにもなっています。つまり、子どもの思いを受容してもいるのです。

- (10) 渡辺先生の考えによれば、今担任をしている5歳児クラスの子どもたちの、クラス全体の関係性は、4歳児クラスの頃から変わっていない。

《答え：b. 妥当でない》

たしかに、子どもが他児の意見を比較的受容できていたことは、4歳児クラス以降一貫していました。しかし、4歳児クラス、5歳児クラスの春から夏、5歳児クラスの12月時点のそれぞれで、子どもの他児への関わり方の質が変わってもいたことを動画の中で説明しました。